

---

# 玉ねぎ日和

やしろ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

玉ねぎ日和

### 【Nコード】

N5950T

### 【作者名】

やしろ

### 【あらすじ】

玉ねぎを剥きながら、一度は考えること。

(転載したものです)

「人も玉ねぎもね、おんなじなのよ」

科学者を始め、いろんな分野の人間を敵に回しかねないこの言葉は、私のお母さんの言葉だ。

カレーだのシチューだの肉じゃがだのを作るとき、テスト前の勉強をしていようが、ハードな部活を終えて疲れていようが、お母さんはいつも私に玉ねぎを剥かせる。

めんどくさいからと言って嫌がっても、逆に料理上手に憧れて包丁を使った皮むきをやりたがっても、お母さんが私に剥かせるのは、決まって玉ねぎ。

「なんで、玉ねぎなのよ」横でニンジンの皮むきをやっているお母さんの横で私はぼやいたことがある。

「なんでって、それは千波に玉ねぎの神秘をわかってほしいっていう、健気な親心からよ」お母さんは、よくわからないことを平然と言いつつ、滑らかにニンジンに包丁の刃をすべらせていく。

私はお母さんからまともな理屈が出てくることを期待するのを諦め、早く終わらせたい一心で玉ねぎの皮と向き合う。

茶色の皮をはがすと、緑がかった皮が顔を出す。茶色と緑がきれいにわかれているとすぐ終わるけど、同じ層にこの2色が同席していると、余分にはがさなくちゃいけないぶん、手間がかかる。少しの差とはいえ、そのぶんの時間が惜しいほどには小学生というのは忙しいのだ。

私が玉ねぎの皮と黙々と向き合っていると、ニンジンが終わらせてジャガイモの皮むきに取り組んでいるお母さんから声がかかる。

「千波、玉ねぎってね、全部皮なんだそうよ」

「知ってるけど」

「びつくりしちゃうわよねえ。剥いても剥いても、実なんか出てこ

ないのよ。皮だけ。これって、すごくない？」

「すごいって、何が？」お母さんの感心ポイントは、12年娘をやってきた私にもよくわからない。

「だってねえ、皮だけよ、皮だけ。ニンジンやジャガイモならさ、剥いてればなんとなく、ああこれが実の部分なのねってわかるけど、玉ねぎは全部皮だから、剥けばちっぽけな芯しか残らないじゃない」

「そうだね」私は、結局何がすごいのかよくわからないまま頷く。そうして、私がすべての玉ねぎの皮をむき終わると、お母さんがまた口を開いた。

「ね、それって、人生によく似てると思わない？」

「はあ？」今、すごく変な顔してるだろうなって自分でもわかったけど、これですんなり頷けるほど、私の思考回路はぶっとんでいない。

「そして、ほら、玉ねぎの皮。これがあると、味に深みが出て、とってもおいしい」

お母さんは、結局自分の発言についてそれ以上解説を加えることなくカレー作りを進めていった。

小学生の日々は忙しいし、生まれてから今までのことをすべて覚えていられるほど私は頭がいいわけではないけど、そのときのお母さんの言葉と、その日のカレーがいつもどおりとてもおいしかったことは、不思議と記憶に残っている。

「なんで、コンソメスープなの」

私が剥いた玉ねぎを次々に鍋に放り込んでいくお母さんを見て、思わず非難の声をあげた。

「あら、千波、コンソメスープ、嫌いじゃないでしょう？」

「カツ丼にしてって言ったじゃん」体重をやたら気にする女子中学生らしくらぬ私のこの発言には、それなりにわけがある。

翌日は部活の試合なのだ。しかも、引退をかけた大事な試合。

縁起かつぎを一笑に付すことができるほど、私には余裕がない。溺れる者は藁をもつかむというとおり、「カツ」と「勝つ」をかけないと落ち着かないくらい、私は緊張しているのだ。

「いいじゃない、コンソメスープ。玉ねぎのパワーがたっぷりよ」また、「玉ねぎ」だ。お母さんは、なんでそんなにただの野菜を盲信できるんだろう。同音異句の単語に平穩を求めようとする私も傍から見ればなんとやらのムジナというやつだろうけど、たしかな根拠があるぶん、正統性がある、気がする。

私のそんな考えが顔に出ていたのか、お母さんは言う。

「あのね、千波。玉ねぎは、全部皮なのよ」

「それは前にも聞いたけど」

「そうだったっけ？まあ、とにかく、これだってわかる実がないのよ。皮の重なりが、このおいしい玉ねぎを形成してるってわけ」

「だから、それは前にも聞いたつてば」中学生になっても、お母さんの言いたいことはよくわからない。

「それと同じ。千波の実力も、日々の積み重ねでしょ？ある日突然、強くなったりするわけじゃない」

お母さんは、そう言いながらもコンソメスープをつくる手順をゆるめない。

「決定的でわかりやすいきっかけなんか、そうそうあるもんじゃないわ。ただ、地道で地味な努力の繰り返し」

だんだん、コンソメスープのいいにおいがあたりにたちこめてくる。そのにおいに顔をほころばせながら、お母さんは続ける。

「でも、そんな皮の集まりが、コンソメスープの深みを生み出すのよ」

お母さんは、私に向き直る。

「大丈夫。千波は今まで、やれることはやってきたはずよ。それを信じなさい」

お母さんは、勘で天気を当てようとするみたいに、根拠がないくせに自信満々に言いきった。

玉ねぎが皮しかないからといって、それが私にとってなんだと言うのだろう。お母さんの理屈は無茶苦茶だ。

コンソメスープを飲んだところで、玉ねぎのパワーをいくら取り込んだって、それで私が自分を信じるという前向きな結論にたどり着けるなんて、本気で思っているんだろうか。

現実的な反論はいくらでも思いついたけど、私はお母さんの言葉に頷いていた。

そして、夕食が終わるころには、押しつぶされそうなプレッシャーを感じなくなっていた。

今さら緊張したところでなんにもならないという気持ちがあつたからかもしれないし、おなががふくれたことで気持ちに余裕ができたからかもしれない。

お母さんが作った、玉ねぎたっぷりの温かいスープがそうさせてくれた。

根拠なんてないけど、それは確信している。

「試験開始の合図があるまで、問題用紙に触れないで待っていてください」試験管の指示に従い、私は何をするでもなく、ただ目の前の冊子と、持参した尖った鉛筆を見つめる。

この試験で、私の受験生生活に、一つのくぎりがつくんだ。

緊張するでもなく、慌てるでもなく、ぼんやりと、そんなことを思った。

今日、この日のために頑張ってきた。でも、今日がすべてを決めるわけじゃない。

ここ一番の勝負どころというのは、それ自体は大して重要じゃない皮でくるまれた玉ねぎみたいに、実じゃない部分の方が多くて、どこまでが皮でどこからが芯なのかよくわからなくて、突き詰めていけば実体なんかない。

重要じゃない部分ばかりのように見えて、それが一つの塊となっ

て実を作っている。

「それでは、始め」

合図を受けて、ページをめくる。

大丈夫。

私たちが大事にしているものは、玉ねぎと同じような作りになっているのだから。

（後書き）

玉ねぎが皮の集まりだと知ったときの驚きは、今でも覚えています。実とかないんですね。でも、あんなにおいしい野菜なのだからそれでいいような気がします。



## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5950t/>

---

玉ねぎ日和

2011年10月8日03時09分発行